

宝石(ルース/裸石)を入れる漆のケース

クラフト分野 井波ゼミ A2201718 高島あかり

研究の背景

枠に留められていないカットされた石を「ルース」といい、それらを収納する箱をルースケースという。

私は、中に入っているものだけでなく外側の箱も大事であると考えている。なぜなら、箱とは、パッと見たときに一番に目に入り、そのデザインだけで中身の印象も変わることがあるからである。しかし、販売されている多くのルースケースは、プラスチック製であったり値段が高いものでも箱そのものに魅力がないと感じてしまうものが多かった。

そこで、ルースの魅力を伝えるために、単体のみでも美しいが目立ちすぎない、バランスの良いデザインのケースを制作したいと考えた。

研究の目的

- ・宝石の魅力を引き出すケースを製作する。ルースを入れる本体に加え、ガラス窓のついた中蓋、ついていない上蓋の二つの蓋を持った形とする。
- ・加飾の際に、近年人工宝石として注目されている京都オパールのフレークを用いる。この宝石の漆芸装飾における新たな素材としての活用についても研究する。

計画(研究のプロセス)

- ・箱の木地の作成・組み立て⇒箱の図面を作成し、木材を切り出す。切り出した木材を、ボンドを用いて組み立て。
- ・木地固め⇒木地自体を丈夫にする目的で、生漆(きうるし)を木地の面に塗る。
- ・塗り①⇒黒ロイロという種類の漆(こしたもの)で木地の面を塗る。
- ・水研ぎ①⇒耐水ペーパー(サンドペーパーの一種で、使用時に水を付けて研磨する道具)を用いて漆面を研ぐ。
- ・塗り②⇒塗り①と同じ
- ・水研ぎ②⇒水研ぎ①と同じ
- ・塗り③⇒塗り①、塗り②と同じ
- ・水研ぎ③⇒水研ぎ①、水研ぎ②と同じ
- ・加飾⇒京都オパールを用いて蓋部分に加飾をする。

画像 1



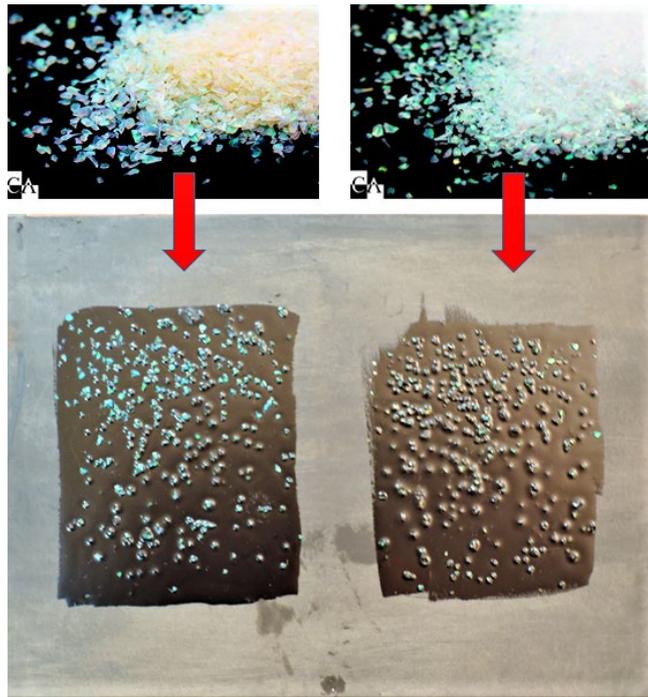
画像 2



画像 3



画像 4



画像 1～3 は水研ぎ①まで終わった状態の箱、画像 4 は使用実験中の京都オパール。

成果物

枠に留められていないカットされた石である「ルース」を収納する、黒ロイロ漆を用いたルースケースである。構造は、ルースを入れる本体の上にガラス窓のついた中蓋、さらに装飾を加えた上蓋がある形となっている。蓋をしていてもルースを見ることができるよう、透明なガラス窓のついた中蓋を設けている。また、上蓋の加飾には京都オパールのフレークタイプを用い、宇宙空間や天の川をイメージしてデザインした。

成果もしくは考察

ルースケースのことを調査する中で感じたことは、やはり同じようなデザインばかりで魅力に欠けるものが多いのではないかという点である。箱やケースなどのものは、パッと見たときに一番に目に入ることから、そのデザインだけで中身の印象もガラッと変わることがある。あくまで主役はルースであるということに留意し、そのルースをいかにして引き立てることができるかを考えながら卒業研究に取り組んだ。

木地の作成のため、実際に市販されているルースケースのサイズや構造も参考にしながら木地図面を作成したが、そこからどのように自分のデザインを生み出していくかというところには、独自のデザインアイテムを作成することの難しさを実感した。また、計画していた作業工程なども、実際に作業にあたった場合思いがけないことが起こったりするなどしてスムーズに進むことができなかつたところもあった。余裕をもって取り組むということを意識していかなければいけないと感じた。

この研究を通して、ルースケースや漆、京都オパールについて多くの人々に興味を持ってもらい、魅力を感じてもらうことができればよいと考える。